慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	J. S. ニカーソン著 マルサス礼賛
Sub Title	Jane Soames Nickerson with an introduction by Russell Kirk "Homage to Malthus"
Author	鶴岡, 慶
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1976
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.69, No.4 (1976. 4) ,p.224(94)- 228(98)
JaLC DOI	10.14991/001.19760401-0092
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19760401-0092

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ド以上の意味を持ちうるからである。スコーブの叙述は，ミシガンからイリノイへ，オハイオからウィスコンシンへ，という具合に目まぐるしく飛ぶので，平均的賃金であるとか，賃金の上昇傾向であるとかいわれても，どの程度の平均か，傾向か，はなはだ頼りない。

しかし，難点はともかく，これだけ多くの史料を集め，農業労働者の実態を，作業内容のみならず，日常生活全般にわたって明らかにしたことは，スコーブの書物の大きな貢献である。時には，材料が豊富すぎて，まとめにくかったのではないかとすら思われる。しかし，これまで誰も注目しなかった史料ばかりであるから，スコーブにしても捨てきれなかったに相違ない。引用が多すぎたり，長すぎたりする感じを持つ読者もいようが，これも仕方のないところである。

以上，性質は異なるが，それぞれに新分野を開拓した二冊の書物を紹介した。アメリカ農業史研究者のみならず，アメリカ史一般に興味を持つ人々にとっても見逃しえぬものと思う。

〔John T. Schlebecker, *Whereby We Thrive: A History of American Farming, 1607-1972.* Ames, Iowa, Iowa State Univ. Press, 1975, 342 pp. 邦価 4,790円〕

〔David E. Schob, *Hired Hands and Plowboys: Farm Labor in the Midwest, 1815-60.* Urbana, Univ. of Illinois Press, 1975, 329 pp. 邦価 4,050円〕

岡田 泰男（経済学部教授）

J. S. ニカーソン著
『マルサス礼賛』

Jane Soames Nickerson with an introduction by Russell Kirk

"HOMAGE TO MALTHUS"

1

マルサス人口論復活の声が（とりわけ第2次大戦後）跡を断たない中で，先年（1974年）ルーマニアにおいて第3回世界人口会議が開かれ，その声はさらに一段と高まってきたようである。

ところで人口論ないし人口問題については，以前からあまりにも多く語られてきた。戦後に注目してみた場合，欧米文献でその代表的なものは，W. Vogt: Road to Survival, London, 1949., K. Smith: The Malthusian Controversy, London, 1951., J. A. Banks & D. V. Glass: Introduction to Malthus, London, 1953., G. Mackenroth: Bevölkerungslehre, Berlin-Göttingen-Heidelberg, 1953., 等々で，これらを皮切りに，人口問題は人口理論の立場から，あるいは社会学の立場から，あるいはまた通俗的な警告の立場から論ぜられ，現在までにこの種の文献は相当な数に上っている。しかし「マルサスは誰も読まずして皆が酷評する本を残した」（J・ボナー）と言われているように，現代の人口問題に関する多くの主張は，内容的にはマルサスそのものから遊離してしまった感がある。

本書も，やはりマルサス人口論の復活という時流に乗って，現代世界の直面している人口過剰問題にメスを入れようとするものである。

著者ニカーソン女史については詳しいことは解らないが，本書に記された著者紹介をそのまま引用すれば次の通りである。「オクスフォードで学び，現在ニューヨークに在住。数年フランスに住み，そこではロンドンタイムズのパリ支局のスタッフとして働いた。そしてフリーのジャーナリストとして，現在まで北アフリカを広く旅行してきている。その出版著作は次の通りである。The English Press; A Short History of North Africa; Autobiography of Marie Avinoff (with Paul Chavchavadze)；その他フランス及びイタリアの書物の翻訳」。

ところで本書の特徴とするところは，単に現代の人

口対策云々ではなく，いわば原点であるマルサスにもどり，マルサスについての種々の誤解を解き，マルサスを再構成しつつ，彼がその生きた時代との接触の中から生み出した諸論点を整理しながら，そこから現代に引き出しうる示唆を得ようとする点にある。したがって勢い本書は，その約3分の2をマルサス自身の再構成に当てている。その意味では本書は従来の人口問題関係の書物に比べると，異色的存在と言えるかもしれない。

本書で語られるマルサスは，人口理論家としてよりももっと広い視野の中で，つまり経済史的・思想的背景をふまえながら把握されている。またそれだけに著者の再構成したマルサス像は，決して gloomy なものではなく，ヨリ positive なものである。従って，著者のこうした展開の仕方は，人口問題の研究者だけでなく学史家にとっても大いに興味をひきつけるものがある。そこで評者は評者の問題意識からして，本書を(著者の直接の意図からは離れるが)人口問題という観点からよりも，むしろ学史的な視点にひきつけて論評してみたいと思う[(1)]。すなわち，本書で展開されるマルサス像を，学史におけるマルサス再構成のための一つの示唆に富むモデルとして評価しようと思う。ただし，つけ加えておきたいことは，本書が理論的なものではなくエッセイ風に書かれたものであるので，内容的一貫性および技術的な面で多少の欠陥があるということである。

まず全体の構成を紹介しよう。冒頭の Introduction を書いているのは米国ロングアイランド大学のラッセル・カーク氏である。それ以下，本書は下記のごとく11章に分かれている。

第1章　予言者
第2章　同時代の人々とその時代
第3章　僧侶マルサス
第4章　『人口論』初版
第5章　『人口論』第2版
第6章　『人口論』第2版，再コメント
第7章　若干の時事論文
第8章　友人と敵
第9章　人口と政府の政策
第10章　自由，平等，博愛
第11章　計画と問題

第1章と第9，10，11章が著者本来の目的である現代の人口問題に直接触れている所である。残りの第2章から第8章まではマルサス自身について展開されている所である。以下章を追って内容を紹介していこうと思う。

2

第1章で著者は，マルサスを真の予言者として評価する。すなわち，現代の精緻かつ豊富な統計資料によれば，人口は一世代50%以上の率で増加しており，現に人口増加に伴う種々の問題が世界各国で生じている。もちろん，マルサスの言説すべてが正しかったわけではない。悪徳，窮乏の内容も現代では多様化しているし，科学の発達により人口の危機は彼の予言ほどにさしせまっていないかもしれない。しかし「おそかれ早かれ人口は食糧供給よりずっと早く増大し，それは悪徳と窮乏……という不可避の結果を導く」(本書 p. 15，以下本文中のページは本書のページを示す)。だからこそ著者によれば「マルサスの『人口論』こそ，初期のあらゆる経済学者の著作の中で，当面の問題に最も関連した研究であった。なぜなら彼の命題は今や証明されつつあるから」(p. 16) ということになる。そこで著者は人口問題の検討に際して，①個人の自由の問題，②避妊手段に関する問題，③人口増減に関しての政治的(政策的)問題，が注目されねばならないとして，以下第8章までは，主にこれらの論点を念頭に置きつつマルサスの再構成を行なうのである。

第2章では，マルサスの生きた時代が述べられる。すなわち，マルサスは18世紀から19世紀にまたがってその生涯を送った。従って，彼の見たものはフランス革命でありナポレオン戦争であり，その他，要するに英国産業革命の中期から末期にかけての，いわば the great upheaval を通して起った一連の事件であった。ルソーの厚き崇拝者であった父ダニエル・マルサスの下で生れ育ち，且つ教育されたマルサスが，世界におけるこうした英国の優位確立期に見たものは，産業革

注(1)　評者は，本書の著者が提起している人口対策について，あえて論評するつもりはない。マルサス的人口理論の批判については，さしあたり以下の文献を参照すれば十分であろう。R. Meek (ed.): Marx and Engels on Malthus, London, 1953. (大島・時永共訳『マルサス批判』昭和36年)，同書の相沢秀一氏による書評(大阪市大『経済学雑誌』第31巻5・6合併号，昭和29年)，真実一男「経済学史上におけるマルサスの復位」(大阪市大『経済学年報』第6集，昭和31年)，上杉正一郎編著『人口過剰論批判』昭和31年。

命の中からはき出されてくる，あるいはまたナポレオン戦争でさらに打撃を加えられた貧民たちの悲惨な状態に他ならなかった。これらを背景にもつマルサスは，彼の時代を最も動揺させたところのフランス革命をめぐる様々な政治・社会理論に対して彼独自の反発をいだいていたのである。こうして著者は，富と人口の急速に増大してゆく英国社会，そして，それとは対照的な貧民の状態，これがマルサスの基本的思想を規定している外的な条件であるというのであるが，これは常識的ではあるがマルサス解釈として根本的に正しい態度であろう。

第3章は，マルサスの生涯が "Travel Diaries" 等を織りこんで述べられる。[(2)] しかし彼の生涯については，J・ボナー，J・M・ケインズ，あるいはわが国では南亮三郎氏らによりすでに紹介されているところであって，[(3)] この章については特に注目すべきことはないように思う。

第4章は，『人口論』初版が扱われる。マルサス『人口論』は彼自身言うように，彼の独創によるものではない。むしろ彼は既知の事実をヨリ明瞭に説明しただけであった。彼はまた理論家というだけでなく，今日言う実地研究家 fieldworker であり，状況を詳細に調べ，現実や経験から証明しうる光の下でその結論を得たのである。ゴドウィン，コンドルセらの人間の完全性を主張する論者に対する彼の批判，そして初版でうち立てたいわゆる2つの公準も，そうした研究態度に基づいたものであった。「すべてマルサスの哲学は観察にもとづくものであった……事実に根拠をもたない推論は……彼の思考様式とは調和しないものであった」(p. 57)。また著者は，マルサスが食糧の増産について，かなり前向きの態度であったとする。つまり彼は真の意味での生産の増大を食糧の増大であると考え，スミスを批判し，当時の社会政策（救貧法）を批判したのである。この点，彼が製造業をあまり高く評価していなかったのは，当時の貧民の状態を考えれば当然であったとしている。彼の全関心は「究極的には人口は常に食糧供給を追いこすであろうという彼の命題にもかかわらず，食糧生産を促進してヨリ多くの人々が養われるようにする」(p. 50) ことであったと著者は言うのである。そして著者は，マルサスの結論について肯定しえないものもあるが，たとえば人口と食糧の関係について見れば，彼はその後の世界的食糧供給の増大や乳幼児死亡率の低下，そして一般的平均寿命の延長等による人口増大を，時代的制限から予見しえなかったのであるとしてマルサスを弁護する。しかし，ともかくも現在食糧の世界的不足がある限り，マルサスの諸命題は今日妥当するのであり，結局は『人口論』初版で彼が明らかにした諸命題は，我々が直面しているものと同一である (p. 54) と言い切っている。

なお評者は，『人口論』初版に関しては，それが直接ゴドウィンやコンドルセらに対する批判を主目的としたのであって，そのことは，第2版以降との相違を考察する際，常に想起されるべきであると思う。

続く第5，6章は，1803年に出版された『人口論』第2版への言及である。著者がこの第2版に注目するゆえんは，一つには人口増大と一国の政策，体制との関連が追求され，また一つには新たに道徳的抑制が加わったからである。『人口論』第2版は，初版に比してばう大な資料が加えられた。著者によれば，初版執筆後のマルサスの大陸旅行が資料提供に大いに役立っているという。すなわち，彼は旅行において，発展段階や国が異なるにつれて人口増加率の異なること，あるいは初版で展開した命題が，それほど純粋に各国に適用できないことに気づいたのであるとしている。ここにマルサスは，様々な例証をもって命題の修正を行なった。たとえば，トルコの人口増加の低率は政府の専制的形態が原因であり，ロシアは食糧供給は十分で生産費は低いのに人口増加が緩慢なのは，製造業の導入が欠如しているため国内市場の拡大が起らないためと，養育院 foundling hospital の存在，あるいは農奴制の存在が原因である，等々。[(4)] 救貧法の場合も含めて，著者は，マルサスは人口増減と政府の政策との密接な

注(2) Patricia James (ed.): The Travel Diaries of Thomas Robert Malthus, Cambridge University Press, 1966. は，ニカーソン女史のように単にマルサスのメンタルヒストリーの跡づけの材料として参照するのみならず，その中に散見しうる物価問題等に言及した個所など，彼の初期の経済学的思考をたどるうえにも，大いに有益な材料を提供しうるであろう。

(3) James Bonar: Malthus and his Work, London, 1885. (堀経夫，吉田秀夫共訳『マルサスと彼の業績』昭和5年)，J. M. Keynes, Essays in Biography, London, 1933. (熊谷，大野共訳『人物評伝』昭和34年)，南亮三郎著『マルサス評伝』昭和41年。

(4) つまり食糧の社会的配分の問題であるが，この点はマルサス『経済学原理』の地代論と関連するであろう。

関連性を指摘した最初の人であると評価している。

次の道徳的抑制の導入については，周知のようにマルサスは，それを避妊と異なり悪徳を伴わない予防的抑制として分類した。まず著者は，この分類自体は現在受け入れられないが，自主的な道徳的抑制は，人間の尊厳と自由にかなう唯一のものであるとして評価する。ところで著者は，こうしてマルサスが第2版で強調した要素は予防的抑制(とりわけ道徳的抑制)なのだが，さらに重視すべきことは Independency の奨励であるとする。マルサスが最も憂慮したのは，食糧の増大を伴わない人口の増大であって，人口増大そのものではない。彼は，人口の適度な成長を主張していた(p. 74)。人口の食糧に対する過剰による窮乏等は，マルサスの依拠する福音主義的観点からすれば，ヨリ建設的に処理せよという，人間に対する神の啓示に他ならない。彼は，結婚を制限するような一切の法律に対して反対したし，また結婚は両性の愛情なしには成立しえないとして，婦人の権利も十分尊重したのである。彼が真に主張したのは，ヨリ多くの人々がヨリ良い境遇へ至る方法であった。そして，政府による個人の自由への干渉を極力きらったマルサスが唯一の人口抑制策としたのは，Independency を精神的基盤とした道徳的抑制に他ならなかったとしている。著者はこの他に，マルサスにおける予防的抑制に関する教育の問題，また住宅の問題にも言及している。

第2版以降の『人口論』全体の基調は，著者の言うように道徳的抑制や多量の資料が付加されることで，初版に比して修正ないし補筆されるのである。しかし我々が見失ってはならないことは，後続の『人口論』各版を通して考察するとき，この第2版での補筆，修正のもつ意味内容である。この点はマルサス全体像の把握にも関連するであろう。

第7章は，マルサスの書いた『人口論』以外の論文等の紹介である。1800年の『食糧高価論』が，後にケインズによって高く評価されたこと，1807年のホイットブレッドあての手紙，および1808年から翌年にかけて "Edinburgh Review" 誌に寄稿した，アイルランド問題に関しての書評等が紹介され，最後に，マルサスの穀物条例論が触れられている。著者はマルサスの穀物条例支持論は，英国の他国への依存の危険と，彼が一貫して田舎の人間であったことに由来する製造業への嫌悪からきているとする。ところが彼の条例支持論は，政府による農業保護を要請するもので，アイルランド問題では政府の不干渉を主張してしたから，この点彼に一貫性が欠けていると指摘している。評者の考えでは，これにかぎらずマルサス特有の dual な主張は十分慎重に検討されねばならないと思う。

続く第8章は，前章と同じく，全体の議論の中心からややはずれた章である。内容的には『人口論』をめぐる誤解，マルサスのリカードウとの交友関係や論争，マルクス・エンゲルスのマルサス批判，その他が述べられる。著者は，この章の中で『人口論』の正しい解釈を強調するのだが，たとえマルサスがヨリ少ない事実しか扱えなかったとしても，その分析は今日なお有効であったろうし，誰よりも明確に問題を把握していたであろう (pp. 107~108) と述べる個所など，著者のマルサス一辺倒が顔をのぞかせていると言えよう。

最後の第9．10．11章は，本書の中心テーマが述べられるところである。著者の見解は，要約すれば以下のようである。すなわち，過剰人口に関する対策については，マルサスが言うように個人の行動について政府の積極的介入は極力避けねばならない。なぜなら，政府の直接的介入は人権への不当な侵害を意味するからである。そしてマルサスの提起した問題について近来様々な対応策が講じられてきたが，たとえば穀物不足国への食糧援助は不足国の人口をかえって増大させるという矛盾 (いわゆるマルサス的ジレンマ) を生む場合があるし，不足国の支払能力の問題も生じる。また，産児調節は先進国では可能でも低開発国では困難である等，多くの問題が存する。マルサスの究極の目標は人口の安定と高い雇用水準をもたらすことであり，そのために彼は責任という裏づけのある自由と政府の不干渉を唱えたのである。そしてこの議論はいまや，一つには (道徳的抑制を含めての) 予防的抑制の奨励と実行，もう一つには世界各国の経済的自立性および穀物供給国の輸出能力と国際的責任 (特に米国のそれが強調されている) という，ヨリ幅の広い次元で十分検討されねばならないとしている。

著者は，要するにマルサス再構成を通して，国際的視野での現代の人口政策，経済政策，社会政策の総合的な再検討の必要性を強調しているのである。

3

以上紹介してきたごとく，本書は現代の人口問題解決への示唆を与えながらも，その大半をマルサスの再構成に注いでいる。ここで本書についての感想を若干述べてみたい。

まず技術的な面であるが，本書には引用文について引用ページが何ら記されていないし，時によっては引用文献名も書かれていない。また『人口論』からの引用文中，indefinitely を definitely と誤記していたり[5] (p. 47)，中略した引用文の前段後段が原文とさかさまになっていたり[6] (pp. 58~59)，第2版を問題にしながらも，実際には第7版からの引用になっている点[7]，など本書の性質上ある程度やむをえないとしても，不正確さが目立つ。さらにマルサスは preventive check と記しているのを，著者は一貫して preventative check と記しているのも気になる。またそうした技術的ミスを除いても，内容的一貫性からして不必要と思われる個所（第7，8章の一部）も散見しうる。『人口論』を問題にするのであれば，むしろ1824年の『人口論綱要』にもページを割いて言及すべきではなかったかと思う。

ともあれ本書のマルサス再構成の部分に限って言えば，著者は Homage to Malthus という立場から，全体的にその積極的面を評価している（もちろん個々の点で著者のマルサス解釈に疑問はあるが）。

マルサスは，経済理論ないし経済思想においてアダム・スミスを彼なりに継承していた。しかし，このマルサスが現に見たものは，著者の言うように，産業革命の中から出現してきた貧民たちの悲惨な状態であった。スミスの予定調和的な考えは，現実によって打ちくだかれたかのようである。父等を通して彼に少なからず影響を与えていたルソー等の大陸の思想も，彼にはとうてい率直に受け入れられるものではなかった。そこでマルサスは貧民の悲惨さの原因を，人口と食糧の不均等的増加という自然的原因に求めた。しかし，彼は著者の言うごとく，そこで歩みを止めたわけではない。彼は，第2版以降における道徳的抑制の強調，さらに一国の政策や体制と人口増減の内的関連等を研究しつつ，マルサス体系を形成していったのである。また彼にとって人口と食糧の不均等な増大は不可避のものであり，宿命であった。それだからこそ『人口論』の精神的基盤は，著者も強調するごとく Independency ということなのである。しかし Independency を精神的支柱としながら築き上げられるマルサス体系は，もちろん『人口論』のみで形成されるものではない。ここに『人口論』と『経済学原理』との統一的理解が要請されるのである（この点に関しては，種々の補筆，修正がなされた『人口論』第2版以降におけるマルサスなりの積極性を，マルサス全体とのかかわりでどのような論理として把握すべきか，ということが当面の問題となろう）。本書で著者が言及しているマルサス穀物条例論等も，その総体的理解の中で，正確に位置づけられねばならないであろう。

言うまでもなく，マルサスの場合，土台は『人口論』である。彼の全体像把握にはともかく『人口論』の正しい理解を前提としなければならない。そして，その『人口論』の解釈にしても，あるいはヨリ広く古典学派の研究に，経済史ならびに思想史という広い視野が必要であることを本書を通して改めて感じることができる。著者も言うように，マルサスは「陰うつな経済学者からはほど遠い存在であった」(p. 43)。モンベルトをして「正に不明瞭な著述家[8]」と言わしめたマルサスも，経済学史の正しい方法によって，再構成され，さらに明確にその意義と限界が見きわめられねばならないのである。

本書に再構成されたヨリ positive なマルサス像は，著者の直接の意図とは離れるが，学史家にとって多かれ少なかれ教えられるところがあろう。紙面の関係で紹介しえない部分もあったが，いずれにせよ本書は単なる人口問題の通俗書として読み過ごされてはならないであろう。

(National University Publications, Kennikat Press, Port Washington, N. Y. • London, 1975 pp. 150.)

鶴　岡　　慶
（慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程）

注(5)　評者の検索によれば，この個所は An Essay on the Principle of Population, 1st. ed., 1798. の p. 13 に該当する。
(6)　この個所は An Essay on the Principle of Population, 2nd. ed., 1803 の pp. 10~11，および著者の使用した Everyman's Library 版では Vol. I の pp. 13~14 に該当する。
(7)　もっとも著者は，序文でこの点断わってはいるが，第2版と第7版では文章が異なっているので注意すべきである。
(8)　P. Mombert: Bevölkerungslehre, Jena, 1929, S. 170.